

## 軽度の精神遅滞を伴う肢体不自由児への排泄指導

駒田 美奈 岐阜県立関養護学校  
坂本 裕 岐阜大学教育学部障害児教育講座

**要 旨**：周りに依存的になってしまう小学部低学年の軽度の精神遅滞を伴う肢体不自由児に対し、学校生活の区切りに留意した定時排泄や肢体不自由を配慮した排泄行動への支援を行った。約4か月の介入で、本人なりの生活の見通しをもって午前中に2回だけトイレに行くようになり、遺尿はまったくなくなった。さらに、介入終了後半年後も、担任は交代したが、本人が判断して午前中に2ないし3回トイレに行くこともできるようになった。さらに、午前中は、トイレまで自分で車いすをこいで行く様子もみられるようになった。このことから、「定時排泄時刻の設定を子どもの生活の中でトイレに行く手がかりになりやすい時刻を設定していく」ことや「かなりの介助が必要な子どもであったとしても、近い将来に自発行動、自立行動になるように見通しを立てて指導のあり方を工夫するなどに配慮する」ことの有効性が明らかになった。

**Key Words**： 精神遅滞，肢体不自由，排泄指導

### I. はじめに

わが国においては、近年、バリアフリーの普及やユニバーサルデザインの採択が進んできており、肢体不自由のある人達も自らの意思のもと行動できる機会が広がってきている(内閣府,2002)<sup>6)</sup>。しかし、彼らが周囲の者による多くの支援を必要とする場面がまだ多々あることも事実であり、支援者の都合に合わせられることも少なくない。そのため、彼らの自立的生活を願うのであれば、自分のもてる力を発揮して、支援を他者に依頼できることも含め、生活の主体者として行動できるよう幼少期からの継続的な支援が必要であると思われる。

そのような支援を必要とする重要な行動のひとつとして排泄がある。排泄の自立支援については、Eills,N.R.(1963)<sup>3)</sup>がS-R学習理論によって重度児の排尿行動も改善できることを提唱した1960年代以降、様々な研究が取り組まれており、Azrin,N.H.&Foxx,R.M.(1971)<sup>2)</sup>の短期指導プログラムを報告した以後は、望ましい排尿行動などに正の強化刺激を随伴させて、自発排尿を確立する指導法が主流をなしている(Anderson,D.M.1982)<sup>1)</sup>。Foxx & Azrin 法

(Foxx,R.M.&Azrin,N.H.,1973)<sup>4)</sup>は、たとえ重度の精神遅滞児であっても、生活年齢が2歳半以上であり、①トイレまでの歩行が可能なこと、②パンツの上げ下げが可能な程度の手の運動機能があること、③トイレに行くことができる視力があること、④簡単な指示が理解できることといった4つの条件を満たせば、1日8時間の短期集中指導によって、自発的にトイレに行って排泄する指導プログラムが可能であった。そして、プログラムの修正や対象児拡大も積極的に検討がなされるなかで、全盲児や肢体不自由児への適用報告もされている。

さらに、大友(1986<sup>7)</sup>, 1997<sup>8)</sup>)は、①春先から夏にかけて指導する。②定時排泄時刻の設定を子どもの生活の中で、トイレに行く手がかりになりやすい時刻を設定していく。③パンツの上げ下げなど、トイレの中での行動が自発しやすいうように、衣服やトイレの工夫をしていく。④トイレの中の指導は、介助をできるだけ減らしていく。逆行型の指導ステップが役立つ。⑤かなりの介助が必要な子どもであったとしても、近い将来に自発行動、自立行動になるように見通しを立てて指導のあり方を工夫する、といった定時排泄指導の中でFoxx & Azrin 法の一部を抜き出して利用する方法を示している。

本稿においては、周りに依存的になってしまう小学部低学年の軽度の精神遅滞を伴う肢体不自由児に対し、排泄行動の自立に向けて、大友（1986<sup>7)</sup>、1997<sup>8)</sup>）が示した定時排泄指導を行う上での留意点を参考にしながら、自発排尿の支援を行った事例について報告する。

## ●

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象者

A児（女）7歳，B養護学校小学部2年生，脳性まひによる体幹機能障害を有する（身体障害者手帳2級1種），斜視  
家族構成は両親，姉（小3），本人の四大家族。  
支援・教育歴：未熟児（900g）として出生。生後6か月より肢体不自由児通園施設C学園に母子通園し，PT,ST,OTなどの訓練，ならびに，保育を受けた。就学前1年間は，地元の保育園にも通っていた。B養護学校では，下学年対応の教育課程で学んでいる。

### 2. 場所

B養護学校

### 3. 実施期間

x年5月～10月

### 4. アセスメント

#### ① 発達検査（x年3月）

新版K式発達検査（生活年齢7歳1か月）  
姿勢・運動：10か月，認知・適応：4歳4か月，言語・社会：5歳3か月

検査そのものには持続的に取り組んだが，操作が伴い自力で完成させるのが難しい課題において，自分から「できない」と言えない姿が目立った。口頭で答える課題においても，とても小さな声で「わからない」「できない」と言うか，首をかしげて相手を見るような自信のない姿が見られた。

#### ② 行動観察（x年4月）

自力での座位保持，四つ這い，両手で何かにつかまっただけの立位保持は可能である。上肢の動きは右半身の方の動きが良い。下肢の緊張が強いため，つかまることでいす座位から立位姿勢など姿勢を変えていくことができる。移動は，四つ這いでの移動，車いすでの移動，または実用性はまだ乏しいが長下肢補装靴を履いてのPCWでの歩行ができる。衣服の着脱は時間がかかるが，上衣は一人で

きる。下衣は座位で壁にもたれるなどすれば何とか一人でできる。

排泄は便器横にある手すりにつかまり立ちをさせると，左手を手すりにつかまり，右手でズボン・パンツの上げ下げをしようとする。便器に座らせれば用を足すことができる。つかまり立ちをし，パンツを上げようとする。片手でつかまりながらのパンツの上げ下げは十分にはできない。また，尿意は感じることができ，ある程度我慢することができる。支援開始前，学校での排尿回数は，午前中に2回，午後からは2から4回程度であった。自分から尿意を教師に伝えることは少ない。そのため，もぞもぞ身体を動かし，大人の顔をチラチラと見る姿を教師がとらえ，「おしっこ？」と尋ねてはじめて，尿意を伝える。そのため，その後にあわててトイレに連れていっても，間に合わず失敗することも多い。その際には，下を向いてしまい，時には泣いてしまうこともある。

#### ③ 環境的調査（x年4月）

学校のトイレは，1年生の時は教室からトイレまでの距離が遠く，トイレも狭く古いことから教師の支援が難しかった。しかし，2年生になるとトイレが教室から近くなり，広く明るくなり，教師の支援も実施しやすくなった。また，学校生活以外での生活上の介助は，主に母親が行っている。排泄に関しても，自宅のトイレは狭く和式であることから，尿意をもよおすと自分でトイレまで這っていき，母親を呼び全面介助で用を足している。遊びなどに夢中になり失敗すると母親は叱責が多くなってしまいうようである。

## 5. 支援仮説

学校でのトイレ内の自力での排泄動作の獲得をめざし，一連の排泄行動の課題分析し，順序だてて1つずつ言語促進や身体促進を行うことが有効であると考えた。A児の場合，排尿動作獲得には十分な時間が必要であること，自力での移動能力がまだ十分に獲得されていないことから，まずはトイレ内の主要な排尿動作獲得を支援の目標にする。そして，午前中の学校での自分の排尿間隔を把握させるように，定時排泄から段階的に学校生活を見通して自分から休み時間に余裕をもってトイレに行くように支援を展開していく。午後は給食時の水分摂取の状況から回数，時間がなかなか定まらず，失敗も多いことから，ゆとりをもって取り組み

る午前中のみを支援対象にする。なお、実際の支援は、新学期の学校生活に慣れ、気温が上昇してくる5月より支援を開始する。また、教師はA児ができたことを褒め、達成感が十分に感じられるように留意する。

## 6. 支援目標の設定及び支援の計画の策定

### ① 支援目標の設定

支援目標 A：学校のトイレ内での排泄が一人でできる。

支援目標 B：午前中、休み時間に自分から排尿意思を示すことができる。

### ② 支援計画の策定

#### a 支援目標 A の支援プログラム

A児のトイレ内の排泄の課題分析を表1に示したように行い、それに対応した言語促進を行う。

StepA 1：担任教師の言語促進と身体促進にあわせて、一連の排泄動作をする。

StepA 2：担任教師の言語促進にあわせて、一連の排泄動作をする。

StepA 3：担任教師と他の教師（1回）の言語促進にあわせて、一連の排泄動作をする。

なお、言語促進は極力フェードアウトするが、転倒などによる怪我を防ぐためにトイレ内に完全に一人にはしない。

#### b 支援目標 B の支援プログラム

StepB 1：休み時間に、A児をトイレへ直接に促す。

StepB 2：休み時間に、A児に休み時間にトイレに行っておくほうがよいことを話しながらトイレに誘う。

StepB 3：休み時間に、A児が自分から排尿意思を教師に示す。

## III. 結果

### 1. 第 I 期(5/7~5/31): StepA1, StepB1

午前中の定時排尿時刻を、登校時 8:50、1 時間目終了時 10:00、給食前 12:10 の計 3 回設定し、A児に尿意がなくても、トイレに行くことにした。

初日(5/7)、休み時間にトイレに連れていくと、少量であるが排尿ができた。以下、課題分析の順にその課題となる点と支援方法、A児の状況を記す。

表 1 A児のトイレ内の排泄の課題分析と言語促進

課題分析	言語促進
教室からトイレまでの移動 ・教師が介助し、連れていく。	
1 車いすを止める。 1-1便座の前に車いすを止める。 1-2車いすのサイドブレーキをかける。	「くるまいす」 「ブレーキ」
2 車いすのステップを上げる。 2-1胸ベルトをとる。 2-2右手でステップを上げる。 →7/8補装靴の先をステップにひっかけステップを上げ、膝を両手で持ち上げて引き上げる。	「ベルト」 「ステップ」
3 車いすから降り、つかまり立ちをする。 3-1尻を少し動かして前に出る。 3-2両手で、便器横の手すりにつかまり、立ち上がる。	「立つよ」
4 ズボン・パンツを下げる。 4-1左手で手すりにつかまり、右手でズボン・パンツを降ろす。	「ズボン」
5 便座に座る。 5-1手すりに両手でつかまりながら便座に座る。 5-2排尿しやすい位置まで、右手でつかまりながら尻を動かす。	「座るよ」
6 排尿をする。 6-1上半身を前に倒し、両手を前にもっていき、便座にうずくまるようにして、姿勢を安定させてから排尿をする。	「まあるくなるよ」
7 トイレペーパーで拭く。 7-1右手で紙を引き出し、ちぎって股の間にいれて拭く。	「拭こうか」

#### ○停止位置(課題分析 1-1)

車いす、便器、手すりとの距離間がとれない。手すりがついた壁面にぶつかっていく。逆に手すりから遠くなる。便器に車いすがぶつかる。2の課題ができ、かつ手すりにつかまれる距離間がとれない。そこで、前かがみになって手すりをつかめたところでブレーキをかけるように指示すると、一人でできるようになった。

#### ○ブレーキ(課題分析 1-2)

これまで大人の支援が多かったためか、A児は停止したら車いすのブレーキをかけることを忘れがちであった。必ず「ブレーキ」の言語促進の後、A児自身がことばで確認するようにした。

#### ○ステップ上げ(課題分析 2)

ステップまで手は持っているのだが、身体が小さく上げることができなかった。そこで、A児の申告後、ステップ上げは教師が行うようにした。

#### ○ズボン下げ・パンツ下げ(課題分析 4)

片手で身体を支え片手で作業することは、A児にとっては難しい課題で、姿勢保持が精一杯

でズボンを降ろしているところを確認せずにやっていた。十分に下ろせず、濡らしてしまうこともあった(5/10)。そこで、5/13以降、下げる位置を膝までと決め、位置を確認するようにした。

#### ○排尿(課題分析6)

排尿の際手すり両手を離すことになるので、姿勢を安定させることが重要であった。幼児用洋式便器であったので両足裏がきちんと床面につくことができた(5/7)。そこで、5/8以降、上半身をまるめて前方に倒し様に座るように促進した(5/8~)。

#### ○トイレトペーパー(課題分析7)

片手は常に身体を支えなければならないので、ひきちぎるように紙をとることになった(5/7)。5/8以降、後ろから手を回すことは難しいので前の股の間から拭くように促進した。

#### ○パンツ上げ・ズボン上げ(課題分析9)

手探りで片手を使って上げるので、腰の部分まできちんとできないことがある(5/7~5/9)。そこで、5/10以降、まずはパンツをあげるようにし、お尻がすべて隠れたらズボンをあげるように促進した。

#### ○車イスへの着座(課題分析10)

一連の流れの中で車イスを一旦便器より遠くに置かないとできないため、「車イスをとってください。」と言うようにした(5/8)。すると、後ろを振り返ることがなかなかできないので勢いで座ろうとする(5/7~5/9)。そこで、5/8以降、右手を車イスの手すりにつかまってから座るような練習した。

これらの8つの行動を5/17までにほぼ一人で全行程10分程度できるようになった。さらに、5/23頃からはA児自から「次は立ち上がるか」と言いながら自分の行動を確認し、行う姿が見られるようになり、6/10までには時間も6~7分と短くなったり、言語促進のみでもできるようになったりした。

## 2. 第Ⅱ期(6/17~7/12): StepA3, StepB2

第Ⅰ期の支援経過を踏まえ、6/10以降、StepA2を省略し、A児の課題分析を他の教師にも説明し、1日に1回担任以外の教師と行った。また、言語促進は排泄動作を忘れた時や危険な時のみに行うようにした。教師が複数人になった直後から、できるだけ教師に頼らず自分で行おうとしたり、「ステップを上げてください」「車イスをとってください」と教師に要求したりすることができるようになった(6/19)。

A児がほぼ一人で排泄行動ができるようになったこの時期に、母親に学校での排泄の様子を連絡ノートなどで伝え、6/24に実際に見ていただいた。母親は、手順に沿ってほとんど一人で行うA児の様子を見て、とても感心された様子であった。また、6/26に医療機関に訓練に行った際、PTに現在の様子を話し、車イスのステップを自力で上げることはできないかと相談した。PTからは「A児の身体が成長すれば(足がのびれば)ステップを上げなくても、跨いで足を床面につけることはできる。しかし、現状では難しい。補装靴の先をステップにひっかけステップを上げ、膝を両手で持ち上げて引き上げたらどうか」との提案あり、訓練課題にも取り入れてもらった。学校でもこの方法に切り替え、6/27から支援を行いながら練習した。7/8までにはステップ操作が一人でできるようになった。

排尿時間については、トイレに誘う際、8:50には「学校着いたからおしっこ行こうか」、10:00には「1時間目終わったからトイレ行こうか」、12:10には「給食前におしっこ行っておこうか」と言ったように、学校生活の流れの中での区切りに行くことを話すようにした。また、1回の一連の排尿動作が終わったら、できたことを褒めるのと同時に、「自分でやろうとするとすぐには、おしっこできないから早めに行こうね。」と話した。

## 3. 第Ⅲ期(7/15~10/13): StepA3, StepB3

車イスのステップ操作が可能となったこともあり、7月中旬にはトイレ内の排尿動作が5分位でできるようになった。そこで、7/15からトイレへの誘導を止め、A児に「トイレが上手に一人でできようになったから、Aさんが自分から『おしっこ』に行くことを先生に教えてね」と話をした。7/16, 18, 8/28, 9/4, 11, 18は休み時間友達との遊びに気をとられ、11:00過ぎまで行かずに失敗することもあった。失敗したときには自分で後始末をするようにしたが、その直後の2, 3日は休み時間毎にトイレに行く姿がみられた。

9/25以降は、「みんな(大勢)行くから」(10:00)、「給食前だから」(12:10)と、A児なりの見通しをもって午前中に2回だけトイレに行くようになり、遺尿はまったくなくなった。

## 4. フォロワー期(x+1/4/8~5/2)

A児が3年生となり筆者は担任を離れたが、

A児自身が判断して午前中に2ないし3回トイレに行くこともできるようになった。さらに、午前中は、トイレまで自分で車いすをこいで行く様子もみられるようになった。

#### IV. まとめ

周囲の者に依存的になってしまう小学部低学年の軽度の精神遅滞を伴う肢体不自由児の排泄行動の自立に向けた支援の経過をこれまで報告したが、以下、排泄動作の獲得と状況に応じた排尿意思の表出の二点から考察を加えたい。

##### 1. 排泄動作の獲得について

最初にトイレ内の排泄動作の獲得に向けた取り組みを中心に行うことで、「こうすれば自分でおしっこができる」と確信をもつことができたようであった。「次はどうするのか、なぜこのようなことが必要なのか」というように一連の動作の流れを大切にしながら、実態に応じた細かい課題設定をすることで1つ1つの動作を確実に理解、獲得することができた。5月連休明けから始めたことで、軽装で操作がしやすい、寒さで頻尿になることがなく、定時排尿時刻を行動観察時より1回増やしたこともあって、ゆとりをもって取り組めた。支援に関しては、身体の不自由さから1つの課題の動作が複雑で時間がかかること、介助が抜けないところがあることから逆行型ではなく順行型の支援を行った。1日3回という支援を通して、介助の必要な状態から、必要な介助以外のみでできるようになり、その言語促進も必要でなくなった。

また、担任だけでなく他の教師と行ったことは、より賞賛を多く受けられるだけでなく、自立に向けて般化されるきっかけとなるものであった。母親に直接見てもらうことで、A児の意欲的な様子や具体的な支援を理解してもらえ、A児のがんばりを認めるような接し方もできたように思われる。また、母親がPTに相談することで、より自立に向けた動作獲得ができた。結果的に学校の指導内容と医療機関での訓練内容をつなぐことができ、一貫した自立へ

指導内容が組めたことも大きい。

##### 2. 日常生活の中での排尿行動について

排尿意思を示すことに関しては、定時排尿時刻を大友(1997)<sup>8)</sup>も指摘するように、生活の区切りにし、A児が納得しやすい理由付けをしてトイレに連れていったことで、定時排尿時刻を理解することができた。また、失敗の際の排尿には時間がかかることをA児と確認し、後始末を一人で行うことで、「みんなに褒められる自力での排尿動作ができるためにはぎりぎりではいけない」という意識をもつことができた。しかし、早く排尿動作を獲得するためには、パンツの上げ下げのために衣服を工夫するなどの必要があったと思われる。

#### 付 記

本報告は保護者の了承を得ている。

#### 文 献

- 1) Anderson, D.M. (1982): Ten years later-toilet-training in the post-Azrin-and-Foxx era. *The Journal of the Association for Severely Handicapped*, 7(2), 71-79.
- 2) Azrin, N.H. & Foxx, R.M. (1971): A rapid method of the toilet training the institutionalized retarded. *Journal of Applied Behavior Analysis* 4, 89-99
- 3) Ellis, N.R. (1963): Toilet training the severely defective patient. A S-R reinforcement analysis. *American Journal of Deficiency*, 68, 98-103.
- 4) Foxx, R.M. & Azrin, N.H. (1973): Toilet training the retarded. Rerearch Press. 東 正 監 訳 (1976): トイレット・トレーニング. 川島書店.
- 5) 細村 迪(2000): 障害児教育の教育課程. コレール社.
- 6) 内閣府(2002): 平成14年版障害者白書. 財務省印刷局.
- 7) 大友 昇(1986): トイレット・トレーニングの短期集中指導法. 川島書店
- 8) 大友 昇(1997): ほめて子育てトイレット・トレーニング. 川島書店.